



診察室

ざくばらん

突然の難聴

まずは耳鼻科

聴神経腫瘍

医者にとつて、誤診ほど忌まわしいものはない。が、落とし穴はアチコチにある。今回は、ワッシーも危なかった。

65歳のSさん。2週間前から、ふわふわした目まがいがあると訴える。右側に難聴があり、キーンという耳鳴りもある。半年前から、突発性難聴で耳鼻科に通院していたとのこと。だが、MRI（磁気共鳴画像装置）の検査はしていない。

よく聞くと、約2年前にある大きな病院でMRIの検査をして、異常なかったというのだ。それが事実なら、聴神経腫瘍はないと考える。だが、突発性難聴にしてもヘンだ。半年もして再発し、目まがいがあるなん

てあり得るか？と、大いに迷った。が、ワッシーは運が良い。たまたま、MRIの検査を試みた。

な、なんと。右の聴神経に直径が4〜5ミリはある聴神経腫瘍が見つかったのである。聴神経腫瘍というのは、聴神経の膜から発生する良性の脳腫瘍である。聴神経の中の蝸牛神経（聞こえの神経）や前庭神経（平衡感覚の神経）をダメにして難聴や耳鳴り、ふらつきを起す。

と、ここまで書いてきて、ワッシーはやたら心配になってきた。難聴に耳鳴り、ふらつきなんか、年を取れば誰だって経験しそうな症状だ。自分も脳腫瘍では？と不安がるひとが増えるのはコワイ。そうだ。聴神経腫瘍は、めったにない病気だ。発生率は、10万人に1人以下だろう。だから、急に耳が遠くなったら、まずは耳鼻科へ行ってほしい。多くみられる突発性難聴などは、早期に治療しないと手遅れになってしまう。

Sさんだって、耳鼻科の先生を責めるのは止めてほしい。同じ立場なら、ワッシーだって同じ診断をしただろう。だから、医者どうしは、他の医者の悪口は言わないものだ。それでもない医者もいるらしい、が、この頃。



イラスト・野畑桃花